

**J** **apanese text**

2016年 春/夏号 日本語編

インタビュー

**アーティスト・インタビュー**

**毛利悠子**

——東京の隠れた風景をアートで再考

撮影＝武蔵俊介

文＝住吉智恵

p.055

古道具や日用品を組み合わせた装置を、電力や磁力、重力といった目に見えない微かな動力で同期させる作品で注目されるアーティスト・毛利悠子。とぼけたムーブメントとオフビートな音や光を発するその有機的な構造は、少々ポンコツでも弛まず力まず頑張っている人間の身体をも思い起こさせる。

「日産アートアワード 2015」では、国内外の著名なキュレーター陣の審査により、気鋭の日本人作家 6 名の中からグランプリを獲得。「私のバックグラウンドについて予備知識を持たない審査員の方も多く、ピュアな状態で臨んだ作品発表では、大学受験を思い出すような緊迫した空気が張りつめていました」とはいえ度胸と愛嬌は彼女の持ち味、堂々のプレゼンテーションだったと聞く。

受賞作はフィールドワークとして続けている「モレモレ東京」を初めて作品化したもの。2009 年から都内の鉄道駅構内で、天井や壁の水漏れと駅員によるその補修方法をリサーチし続け、そこに即興的なクリエイションの作法を見いだした。「河川に近い駅ほど大々的にモレてることが多いです。駅によって応急処置的な雑な対応もあれば、老舗百貨店に直結した三越前駅では、大理石の壁に皸ひとつなくビニールを張っていてプライドを感じました。都心の環状鉄道・山手線の全 29 駅を 1 カ月半かけて 1 周したら、出発点の駅でまた新たなモレが見つかって……永遠に終わらない！」

今回のインスタレーションでは、現代美術の祖マルセル・デュシャンへのオマージュとして、水漏れ対処にデュシャン

好みの車輪などのほかペットボトルやホース、バケツといったレディ・メイドを使用。さらに彼の伝説的な代表作《彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも》(通称《大ガラス》) のフレームを引用している。

2011 年の震災による地盤の揺れで、東京のモレは一挙に増え、当時は土嚢やシャッターで水を阻止する「笑えない状態」だったという。しかし彼女は、都市を複雑で曖昧なエネルギーが循環する生態系と捉え、その隅々に「はみ出す自然」と人間との関係性を探る。

「水漏れのようにシステムでは制御しきれない予測不能の〈バグ〉に直面したとき、人は想像力をかき立てられ、副産物を生むことがある。そこには物理的なエネルギー循環とともに、生と死の力学や祈りといった、無意識レベルの普遍性が通じている気がするんです」

毛利のクリエイションの魅力は、マッチョな押しの強さとは対極の、こまやかに抑制された受動的な働きかけによって見えてくる「隙」だ。都市の風景に、人間の身体性に、程よく風を通す「隙」の美学は、がんじがらめの現代社会の隅々で、そろそろ利いてくる頃かもしれない。

**「THE BEGINNINGS (or Open-Ended)」展 (part 2)**

～3月27日

ポトラック・ビルディング・ギャラリー

愛知県名古屋港区名港 1-19-23

www.mat-nagoya.jp

**六本木クロッシング 2016 展：僕の身体 (からだ)、あなたの声**

3月26日～7月10日

森美術館

東京都港区六本木 6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 53F

www.mori.art.museum

(写真)

毛利悠子《モレモレ：与えられた落水 #1-3》2015 年 「日産アートアワード 2015」での展示風景 写真＝木奥恵三

## 東儀秀樹

——悠久の時を超えて響く「地球的音乐」

撮影＝合田昌弘

文＝岡崎香

p.056

雅楽は、日本古来の古楽と、1400年ほど前からアジア大陸諸国よりもたらされた音楽と舞が融合し、10世紀頃に完成した日本の伝統芸術だ。器楽演奏と舞と声楽からなり、数種類の日本固有の楽器と外来の管絃打楽器を合奏することから、現存する“世界最古のオーケストラ”といわれる。

「雅楽には古代アジア諸国の音色、つまりシルクロードの音色が残っています。それを伝来当時と同じように奏でられるのは、地球上で唯一、日本だけです」と、雅楽師の東儀秀樹さんは話す。奈良時代から雅楽を世襲してきた楽家の家系に生まれた彼は、1986年に宮内庁式部職楽部に入り、主に筆箒ひちりきを担当して、宮中儀式や皇居、海外等での演奏会に出演。一方で、雅楽器とピアノやシンセサイザーを組み合わせた独自の曲を創作し、96年にはアルバムデビューを果たす。以降はフリーの音楽家として活躍。ジャンルを超えた活動で、雅楽の魅力と新たな可能性を現代に広めている。

「大陸では、新たな勢力が広大な国土を掌握する際に、各土地固有の音楽が失われたりしてきました。それで時代とともに民族音楽も変化してきました。その点、日本はアジアの東端にある島国で、独自性を保ちやすかった。しかも四季の変化が豊かなため、多様なものを楽しむ土壌があり、また国土が狭いので価値観を共有しやすい。そういったことが、シルクロードから仏教文化として入ってきた雅楽を拒絶せずに取り入れて消化し、それをそのままの形で今日まで伝承できた理由だと思います。雅楽のすべての楽器の形も音色も、飛鳥時代に日本に渡来して以降、ほとんど変化していません。そうやって文化を守ってこられた日本はとても素敵な国だと、誇りに思えます」

古来、宮中や社寺等で、儀式や季節に合わせて奏され、江戸期には1000曲以上あったともいわれる雅楽。現在、宮内庁式部職楽部では100余曲を継承しているが、それら

はすぐに口ずさめるような明確なメロディラインを持たないため、慣れない人にはどれも同じような曲に聴こえるかもしれない。しかし東儀さんは、そこに雅楽の本質があるという。「今の僕らは耳でメロディを追って音楽を楽しもうとしますが、そもそも雅楽は身体全体で感じる音楽なんでしょうね。実際、音に身を委ねてその渦に巻き込まれていくと、聴き終わったときに体が浄化されているように感じられると思います。それは僕らの細胞が、音の振動と同調しているからじゃないかと、僕は信じているんです。人間の体もひとつの宇宙だと捉えると、自然や宇宙と真に調和した音楽が雅楽ではないかと思っています」

ちなみに雅楽では、“天から差し込む光”を表す笙しょう、“天と地の間を縦横無尽に駆け巡る龍”を表す横笛りゅうてきの龍笛、“地上にこだまする人々の声”を表す筆箒の3つの管楽器を“三管”と呼び、合奏することで宇宙を創ることができると考えられてきた。確かに、心地よい独特のゆらぎに満ちた東儀さんの筆箒や、天から注ぐ音に包み込まれるような笙の音色を聴けば、まさに悠久の歴史と壮大なスケールを持った音楽だと実感できるだろう。

「実は、西洋音階が確立されて楽典が完成する遙か昔からあった雅楽の音階も、ドレミファソラシドなんです。雅楽には、陰陽道といわれるいにしへの自然哲学や天文学等も織り込まれていて、その完成度は計り知れません。実際、シルクロードの時代には西洋と東洋の境界なんてなかったわけですし、地球人みんなに響く力を持った、まさに地球的な音楽だと僕は思っています」

楽家の母を持つ一方、商社マンの父の仕事の関係で幼少期を海外で過ごし、ロックからジャズやクラシックまで、多種多様な音楽を吸収しながら成長した東儀さん。さまざまな楽器にも精通しているだけに、その言葉には説得力がある。雅楽を現代音楽と結びつけ、筆箒の音色を生かしたオリジナル曲やポップス等のカバー曲を多数発表。2004～2008年には、自ら選んだ上海の若手一流民族楽器奏者とユニット「TOGI+BAO」を組んで活動し、大好評を得ている。

そんな彼が、また新たなプロジェクトを立ち上げた。台湾

で東儀さん自身がオーディションをして選んだ新進気鋭の二胡、琵琶、笛子の奏者6名と、ユニット「東儀秀樹 with RYU」を結成したのだ。きっかけは、東日本大震災の際に真っ先に多大な支援をしてくれた台湾に感謝の意を伝えようと、2013年に自身が評議員を務めるクラシックカーのラリーイベントで、初めて台湾を訪れたこと。各地で大歓迎を受け、人の温かさに魅せられた東儀さんは台湾観光親善大使に任命され、「肩書きだけの親善大使ではなく、自分にできる形で交流を深めたい」と考えた。

そこで思いついたのが、BAOの台湾バージョンともいべき、台湾の若き天才伝統楽器奏者たちとのコラボレーションだ。3月には東京と大阪で、世界デビューコンサートを開催する。

「僕のオリジナル曲のほかに、クラシックやタンゴ、日本の歌等の名曲も演奏するつもりです。台湾公演もぜひ実現したいですね。そこでまた何か渦が起きれば、次の展開も自ずと見えてくるんじゃないかと思っています」

#### 東儀秀樹 with RYU 2016

3月19日 12:30 開演、16:30 開演 (全2公演)

Bunkamura オーチャードホール

東京都渋谷区道玄坂 2-24-1

予約：チケットスペース Tel. 03-3234-9999

3月20日 16:30 開演、19:30 開演 (全2公演)

ビルボードライブ大阪

大阪市北区梅田 2-2-22 ハービス PLAZA ENT B2

予約：ビルボードライブ大阪 Tel. 06-6342-7722

www.togihideki.net

(左ページ)

東京にある自宅の仕事部屋にて。古今東西の楽器が並ぶ。

(上)

箏。竹でできた18cmほどの縦箏。蘆のリードを差し込み、オーボエと同様の原理で音を鳴らす。雅楽では主に主旋律となる部分を担当。

(中央)

笙。17本の細い竹筒を束ねた形状が、翼を立てて休む鳳凰を思わせることから、「鳳笙」とも呼ばれる。パイプオルガンと同様の仕組みで和音を奏でる。写真は、ガラスメーカー「HARIO」と東儀さんが共同製作したガラス製の笙。3月の公演でも演奏予定だという。